

NPO法人 海に学ぶ体験活動協議会 第7回全国フォーラム

～海と生きる～

期日 平成25年2月2日（土）13：30～17：30

会場 東京海洋大学品川キャンパス

楽水会館1階大会議室（鈴木善幸記念ホール）

全体討議「今、海と生きる、とは」

司会 それでは、時間となりましたので、フォーラムの後半部分を始めたいと思います。

「今、海と生きる、とは」というテーマのもとで全体討議をしていただきます。討議は、CNAC代表理事の三好にコーディネートをお願いいたします。

それでは、三好代表理事、よろしくお願いいたします。

三好 それでは、後半ということで全体討議ということになっていますが、進行の役を務めさせていただきます。お時間が5時半までということですので、限られた時間ですが、キーノートのお二方、それから活動事例報告のお三方がいらっしゃいますが、もう少しお話を聞くとともに、会場の皆さんにもご意見をいただいて、全体討議のテーマは「今、海と生きる、とは」ということですので、会場の皆さんも何がしか海にかかわる活動、あるいはお考えを持っていると思いますので、ぜひご意見をいただきたいと思います。

その前に、私が先ほど事例報告等を聞かせていただいてご質問をしたいんですが、大野木さんの「海のバリアフリーまつり」の予算はどこから助成が出ているんでしょうか。7年やっというていらっしゃるということですが、話せる範囲で結構ですが。

大野木 それが一番つらい部分でして、収入はほとんど……

三好 ないですよ。

大野木 はっきり言って、ない。だから、マリナー河芸に人的、場所も全部無料で提供してもらって、我々が寄附をもらっているダイイチという会社と第一楽器という会社、両方からお金をもらって。もらっているといっても、完全にもらっているんですが。それと、一部、業界の人間、業界から若干協賛してもらったりしています。

三好 という形で、やはり参加者の皆さんからは当然、参加費とかはないんですか。

大野木 もらってないです。

三好 無料参加ですから、全部持っている。ただ、その辺でいつまでやるのかというところがあったんだけど、一応、第7回と打ってしまったということですね。

大野木 ボランティアとスタッフだけでも160人から——今回159人だったかな、スタッフが応援に来てくれるわけです。彼らは当然、食事もあるし、飲み物もあるし。だから、ただというわけにはいかないの、金は出ていくんですね。皆さん、ボランティアで来ていただくけれども、食事は食べてもらう。ボランティアとわかるような帽子をかぶってもらう。まるっきりただというわけには当然いかないの、そのところが大変です。

三好 そうですね。イベントをすれば、全て何がしかの経費がかかりますからね。その辺の運営が

多分大変なところだと思うんですけど。

ありがとうございました。

あとは、大塚さんの積丹町とのつながりというのは、ここまで来るのに、結局どのぐらい、何年ぐらいかかりましたか。

大塚 うちの会社として、私は別に仕事をやってですけども、ダイビングサービスとしてのかかわりは、地元と30数年あったわけです。ただ、漁師さんと「あのみ」と声をかけられるようになったのは、この活動を始めてからですから、5～6年というところじゃないでしょうかね。ダイビングサービスと漁師さんというのは同じフィールドを使っているけども、水と油みたいなところがあって、「あいつらと話しちゃだめだ」みたいなのがあったりするところがある、これは結構、全国的にあったりしますしね。組合さんに挨拶に行っても、「俺ら組合としてはダイバーはよしとしてねえんだ」と一言で片づけられたりしますから。そういった逆境を乗り越えてきたと考えると、まあ、頑張ったと思うんですけど、それでもそういう話ができるようになってから5～6年はかかっていますね。

三好 5～6年。地域の方々とのつながりというのはやはり時間がかかりますね。

それから、鈴木さん、これは190ウン回という形で、リストをいただいていますけれど、の中にはいろんな企業さんとか、そこの実施は亀の子さんから言っていく？ 向こうから言ってくる？

鈴木 実は手紙作戦を始めたときに、愛知県内のいろんな企業さんとか、伊勢湾、三河湾を取り巻いている地域で働いている海運業さん等に送ったときに、幾つかの企業さんが賛助会員ということで来ていただけたんですね。その企業さんが亀の子隊の年間計画の中で、何月の活動に参加しますというように来ていただいているという、そんな感じでやっています。

三好 こちらからアプローチしているということですね。

鈴木 毎回毎回アプローチはしてないです。もちろん賛助会員さんですので毎月のお便りは出していますし、年間計画も4月途中に送るわけですので、それを見て、向こうが「じゃあ、今度行きますよ」というようなことで来てくれる。活動の前に「来てもらえますか」というようなことはしてないんですけど。

三好 基本的には土日が中心で、平日のほうが学校授業みたいな……

鈴木 自分は現役でまだ教師をやっていますので、平日は全く無理ですので、土曜日、日曜日、基本的には日曜日ですね。ですので、回数がそれ以上こなせないというところです。

三好 ありがとうございました。

それでは、まず全体会の討議は、「今、海と生きる、とは」ということですが、鈴木さんはボランティアでこの活動をやっていらっしゃるんですけど、それぞれ個人として、きょう事例、あるいはキーノートスピーチをしてくれたお二方もそうですが、今、自分がこうやって海とかかわっていらっしゃるんですけど、そのきっかけは何と聞かれたら、何とお答えになりますか。今回、5人の方にペーパーをお持ちいただいていますので、そのペーパーに、今、海と関わられている、それを遡っていくと、きっかけは何だったんでしょうか。マジックがありますので、横で書いていただいてもよろしいですね。それは油性のマジックですので、重ねて書いていただいて。1枚に、5人の方々が今、海と生きている活動をされているんですけど、そのきっかけは何だったかと聞かれたら、何とお答えになるでしょうか。

会場の皆さんも、逆にきょうこのフォーラムにお越しいただいたのは、「海と生きる」というテーマに何らかの関心がある方々だと存じますので、皆さんもちょっとお考えになっていただいて、自分がなぜ海に引かれているのか、ちょっと考えていただければと思います。

堀 早いんですね。堀さんは当然のごとく。

では、野田さん、ちょっと手伝っていただいてもいいですか。

じゃあ、皆さんが書いている間に、早い者順ですから、しゃべっていただきます。堀さんは、当然のごとく、サーフィンと書いておられる。ちょっと補足をしていただいて。

堀 補足ですか。

三好 ええ。

堀 やっていただければわかるんですけど、気持ちいい。以上です。(笑)

三好 終わりですか。

堀 終わりです。(笑)

三好 いつからですか、実際に……。18歳？

堀 そうですね。18歳ですね。大学1年です。

三好 それは東海大学に入られてからですか。

堀 そうです。大学1年のときに。

三好 先輩に誘われたとか。

堀 友人ですね。

三好 友人？

堀 はい。

三好 一応ほかの方々も出ましたので、では、大塚さんから。タカクワクラブ？

大塚 タカクワクラブというのは、小樽に80年ぐらい前からある日本泳法の教室がありまして、競泳とライフセービングと日本泳術みたいなのをミックスした教室があります。小学校の3年生のときから行って、非常に行くのが嫌だったんですね。怖くて。戸塚ヨットスクールが問題を起こしているちょうどそういう時期で、「小樽の戸塚か」みたいなことを言われていたんですけども(笑)、ここで泣いても何をして海に行って、毎日、夏の間ずっと海に行きましたから、こういうのが原体験になったと思います。そのまま高校はボート部に入って、大学でスキューバーダイビングで、海洋研、ダイビングショップへ入って海洋調査に行くという道を歩んだのは、多分ここがスタートだと。

三好 ありがとうございます。

戸塚ヨットスクールがわかる方は手を挙げていただいて。結構多いですね。いろんな意味で非常に先駆的なスクールでございますね。実は私も実際は子供たちの自然体験活動をやっているんですが、うちも不登校児を預かっていたときがあったので、そのようなところはいろんな意味で気になっておりましたけど。

それでは、お隣の大野木さんは、ちょっと小さ目に書かれましたが、漁でよろしいんですか。

大野木 漁。ええ。私は生まれも育ちも神島ですので、生まれたときから島で、イメージ的には怖いというイメージで、身内も何人か亡くなっていますし、同級生も亡くなっている。基本的には紹介のプロフィールのところに書いてありますが、海が嫌で、島外の……。ただ、陸(おか)へ上がっ

てから気がついたことは、基本的には海をなめとるなど。陸の人たちは海をなめているねというのが一つ。それと、レジャーの商売を始めたときに、漁師さんの権限というのか、漁師さんの厳しさも知らないのに、平気で「海はみんなのもんだ」みたいなことを主張する。そういうものが物すごく嫌で、それでよくレジャーのお客さんなんかとも、海の話になってもめたりするんですけど。海をなめないでくれと。基本的には。海をなめたらあかんよというのが実はあって、それで熱く海へ入ってしまった。逆に戻ってしまった、みたいな。こそっと釣りには身内には内緒でよくやって。出た手前、海にはさわらないようにしていたんですが、こそっと釣りには行っていたんです。釣りは好きで。それで、今は仕事にはまってしまうということですね。最近、子供にハマってます。

三好 ありがとうございます。

では、鈴木さん。総合的な学習、ごみ、スナメリと3つ挙げておられますが。

鈴木 済みません。きょうはどうも自分が教員であるということを全面に打ち出しながら話をしているなということが多くて、ちょっとつらいんですが。渥美半島ですので、自分も子供のころから海へ釣りに行ったり、泳ぎに行ったりしていましたが、正直言って、ずっと高校時代から大学時代は海から離れていました。教師になってからも、海へ行って学習をするということもほとんどなかったんですね。

ところが、ちょうど平成10年に勤めた学校の子供たちが、先ほど話の中でもさせていただきましたが、海へ行ったとき、実は総合的な学習のまだ始まる前ですが、そこで海に行き、ごみと出会い、そのごみ拾いをしている途中で、三河湾や伊勢湾にスナメリがいるということを教えてくれた、実は海野さんの後輩の林正道というのがいるんですけど、彼と出会って、こんな海にこんなほ乳類がいるんだよということをもっと教えていかなきゃいけない。そのためにはスナメリの保護ではなくて、スナメリたちが安心して生きていける海をつくるにはどうすればいいんだろう。そうすると、ごみをもっと拾っていかなきゃねというところで、3年間、子供たちと総合的な学習で進めていって。

その間に亀の子隊というサークルができ上がってきて。1年契約の会員の子供たちなんですけど、毎年毎年、新しい子供たちが入ってくる。出ていく子も当然いるんですが、継続して子供たちがやってくれていますので、そのまま自分も引きずられて今やっている。そんな感じです。

三好 ありがとうございます。

では、穴原さん。島に生まれたから、親、そしてモイヤー先生と書いていただきました。

穴原 そうですね。やはり島に生まれたので、先ほど話もさせていただいたように、生まれたころから遊ぶ場所が海だった。夏になれば、毎日のように友達とも海に行っていましたし。実はうちの両親は島の出身ではなく、島に赴任してきて、そのままずっと移り住んでしまった、ちょっと変わり者の両親なんですけれども、その両親が海も好きだったので、夏は当然、行っていたんですけども、秋とか冬とか、島の人も普通、海には泳ぎに行かないだろうという時期でさえ、ちょっと海がないで、天気がよければ、「じゃあ、海に遊びに行こう」みたいな家族だったので、海が本当に当たり前であったところですかね。そして、そのときにモイヤー先生と出会って、さらに生物という観点で海に引かれていったという感じです。

三好 ありがとうございます。

今、代表理事を私は務めさせていただいているんですが、個人的には野外教育事業所ワンパク大学

という団体の代表でございまして、何とその団体が生まれたのは、実は穴原さんの生まれ故郷の三宅島で、穴原さんが生まれる前に始まっておりまして、穴原さんとは非常に深い縁もあるんですが。私も実際に今何でこんな役をしているかという、三宅島に大学3年のときに偶然、手伝いに行ったことがきっかけで、何とそのまま仕事になってしまったということで、この30年間は三宅島に始まって、今現在も三宅島が続いているという状況でございます。

キーノートのお二方、あるいは事例のお三方もいらっしゃるんで、逆に今5人の方々がお互いの発表で聞きたいこと、ご質問がありましたら、どうぞこの場で。発表の中でこれはどういうことかというのはいかがでしょうか。

穴原さん、何か聞きたいことはないですか。どなたでも結構ですけど。

穴原 皆さんを通じてお伺いしたいなと思うんですけども、やはり海の教育とか、環境教育とかということも、やっている方は共通されていると思うんですけども、今、自分が島でやってきて悩んでいるのは、かなり本質的なことかもしれませんけど、教育の活動ではなかなかお金にならないみたいなところがどうしてもあるんですね。なので、皆さん、それぞれ別にいろいろ会社をお持ちとか、なりわいがあるってということだと思うんですけども、その辺のバランスというか、継続していくためにはやはり元手となるものがなければいけないと思っているので、それをどういうふうにして捉えていらっしゃるのか。自分のなりわいと、そういう活動は全然切り離して考える方もいるかと思えますし、それをうまく利用してやっている方もいらっしゃると思うので、その辺のご自分の考え方や失敗談を含めて、いろいろアドバイスしていただければなと思います。

三好 テーマの「海と生きる」ということで、鈴木さん以外は——鈴木さんはボランティアという形で、完全に自分のお仕事があって、それ以外のところでやっている形ですが、逆の残りのお三方に聞いてみますかね。

先ほども言っていたんですが、堀さんがビーチマナーにたどり着いた……。なぜビーチグラスを環境というか、そういう形で……。そのきっかけももう一度ご説明していただいてもよろしいですか。ビーチマナーというものを思いついたところが、ご説明がなかったんじゃないかと思うので。

堀 そうですね。私はいろんな仕事をしているんですけど、大学を卒業していろんな仕事をした中で、茅ヶ崎市にがんこ本舗というエコ洗剤をつくっている会社があるんですね。

三好 洗剤？

堀 洗剤です。基本的には台所洗剤と洗濯用の洗剤。洗濯用の洗剤が主に売れている商品なんですけど、その洗剤が「海へ」という名前の商品で、1日で94%生分解するというのが売りの洗剤です。要は空気中と水中にすんでいる、僕らの目には見えない微生物が油汚れやいろんな汚れを食べてくれるんですね。それで二酸化炭素と水に分解してくれる。そういう1日で94%分解する洗剤で、2日間あれば海へ流しても大丈夫という洗剤の会社に2年ぐらい勤めていたんです。その会社がユニークで、「直也、おまえは仕事の他にエコサーファーの活動も同時にして良いよ。うちの売り上げから給料もキチンと出すよ」ということで、「本当に？」という、そういう変わった社長が実は陰のサポーターでいました。

その会社の社長がすごくユニークな方で、とにかく取材がぼんぼん来るんですよ。それで、いつも取材しているんですね。そうこうしているうちに、お客さんもたくさん会社に来るんですね。それ

で、「ビーチクリーンに行ってきた。ごみを拾ってきたら、うちの商品をディスカウントしてあげる。ごみをたくさん拾って海をきれいにしてきて」と言ったら、ビーチグラスとか、ちょっとかわいらしい流木とかを持ってきて、「それ、いいね。じゃあ、もっとディスカウントしてあげよう」みたいな、そういう社長さんで。それで、がんこ本舗がビーチマネーの原型である、「何となく、そういうの、いいよね」という1店舗目だったんですね。

そのがんこ本舗の社長に僕が、「これはおもしろいから湘南じゅうで広めてみようか」ということで話をしたら、「直也、やってみな」ということで、さっきの「ビーチマネーマップ」というルールブックみたいなものを自分でつくって、44店舗に営業に行ったんですね。そうしたら、42店舗、ほぼ100%のオーナーが、「いいじゃん」ということで、2006年4月にがんこ本舗の1店目から始まって、2007年4月、1年後から42店舗で始まって、一時期は90店舗ぐらいまで行ったんですけど、子供ができたり、奥さんができたり、いろいろ活動がままならなくなってしまって、1回、全部電話して、「済みません。ちょっとサボっていました。もう一回キチンと運営しますので、継続していただけますか」という風に連絡したところ、90ぐらいのお店が45店舗ぐらいになってしまって、それがまた少しずつ戻ってきているという状況です。

いろんな歴史があるんですね。常によかったわけじゃなくて。なので、そういうきっかけがあってビーチマネーが今踏ん張っている。ということで、ビーチマネーの活動に関して、僕はボランティアですけど、そこにかかる経費というのは全部、がんこ本舗が全面的にバックアップしていただいているので、そこに関しては僕はすごくラッキーだと思います。

三好 なるほど。今の穴原さんの関してはどうですか、堀さん。

堀 何でしたっけ。

三好 今のところはいいですか。生計というか。

堀 生計ね。

三好 弓ヶ浜で林業を……。

堀 はい。林業と漁業とネイチャーガイドです。先ほど漁師のお話が出ていましたけれども、僕も漁師とトラブルとか、ビーチクリーンをしていて怒られたりとか。「おめえ、横須賀からやってきて、辻堂でビーチクリーンしやがって、何か偉そうじゃねえか」とか。ごみを拾っていて怒られちゃったとか。でも、彼らの言い分としては、ごみ拾いをするにも礼儀があって、謙虚にやれと。そもそもそのビーチでずっとビーチクリーンをしているサーファーがいて、彼らのところにまず行って相談して、「やりたいんだ」と。そういう経験も積んできて、取っ組み合いのけんかはしていないですけど、それなりに怒られてきました。僕もトッポいほうなので。

やり合ってきた中でわかったのは、逆に一番きついところへ行ったほうがいいなと思って、僕は今、林業と漁業へ行っているんですね。林業も漁業も、親方たちはめちゃくちゃやっばり厳しいですよ。めちゃくちゃ厳しいし、めちゃくちゃ給料も低いし。でも、すごく教わることはあって。そこを通らないと、僕がやりたいことは絶対できないので。今36歳なので、とりあえず30代ぐらいはそこで踏ん張って、やっていこうかなということで、今は飯が食えればいいということで、その道で食べています。(笑)

三好 じゃあ、少し人生の先輩である大塚さん。

大塚 僕もかなり変人の部類に入るんじゃないかなと自分で思っているんですけど、会社の中でこの手の活動を一生懸命やっていると、「おまえは何のためにやっているんだ」と必ず言われる経験をした方は、この中にも結構いらっしゃるような気もしなくもないんですけど。

自分なりに納得する2つを考えてみたんですけど、例えば新しい価値をマーケットの中で認めさせてお金をもらうというのは非常に難しいことなんですね。既存の仕事でもなかなかうまくいかないこの昨今に、新しい商品をつくって、それに対する対価をくれというのは非常に難しいわけなので、そこを一生懸命すぐにやろうというのは、僕の場合、諦めました。

1つ目に、自己実現というのがおもしろさとしてあるので、仕事をやっても完成できないとか、実現できないものを、海の中で何かやってもいいんじゃないのと。これは仕事の上で10分の1ぐらいのシェアしか占められないんですけど、休みのときとか——僕はほとんど週末はありませんから、そういうところを使って一生懸命やるというのがまず一つ。

もう一つは、これは会社をだます方便として、これはとある経済誌を見ていましたら、こういう言葉がありまして、CSRという言葉がありますね。CSRは幻である。企業のマスターベーション的にお金を出したらいいいんだよと言ってやっているのが多いよね。僕は、そうだ、そうだ。僕もお金をもらったことがありますけど、企業名にちょっと花が添えられるぐらいな感じかなと思うんですけど。そこでCSVという言葉がありまして、Creating Shared Value ということです。RではなくてV。もともと言葉の意味が違いますけど。新しい価値を地域と一緒に作り上げましょう。それが将来的には地域のためにもなるし、当然そこに長くかかわっている企業が、将来、新しい価値観を共有できたときに、そこが一番先駆的になっているわけですから、ビジネスとしての可能性もあるかもしれない。というところで、社長なんかをだますときには、こういうことも最近はあるらしいです。(笑) それでやっています。

三好 先ほどのお話だと、地域の宝というやつですね。

大塚 そうですね。

三好 野田さん、あれを張っておいていただいているですか。せっかく書いていただいたので。

同じく、人生の先輩、大野木さん、いかがでしょうか。

大野木 私はマリンの関係の販売会社です。ボートを売って報酬をもらっている会社です。それと、ボートを管理している会社。ただ、収益なんて考えたら今の時期なんてまるっきりできないみたいな世界です。基本的にはマリンの世界というのは、皆さんもご存じのように、いまだに加山雄三と石原裕次郎という世界で、何か特別な人の世界と思う人がある。我々のマリナーの入り口でもうろうろしている人たちが結構いるんですね。「私たちが入って行ってええんやろうか」と。高級なホテルで勝手に待ち合わせして好き放題しているのに、マリナーだと入ってこない。ちょっとここは違うのかなと。そういう敷居の高い部分を低くしたいというのが、もともとの基本の流れにあったんですけども。

ただ、今現在、障害者や子供たちとつき合いをしてる中ですけど、特に障害者の方は、わざわざ名古屋から、渋滞しているのに2時間もかけてきて、帰るときには4時間ぐらいかかるのに来て、別にボートに乗るわけじゃない、ヨットに乗るわけじゃない人もいるわけです。ただ、どこかでおにぎりを買ってきて、海のそばで食べて帰っていくという障害者も結構多くて。これはやっぱり受け皿として我々は受け入れないとあかん。それと、ボランティアの皆さんがそれだけ力を入れてしてくれて、

150名から来てくれるような組織になっていますので、やっぱり引けないなど。だから、本音で言うと、引っ張られているような、無理やり引っ張られて活動しているようなところがありますね。

ただ、会社に対しては、社員も使いますし、つらい部分は非常にあるんですけども。だから、何とかわずかでもお金の入る、まあCSVが一番いいんでしょうけれども、そういう意味で、わずかでもお金の入るような仕組みというのは、何か持っておかないと続かないのかなという気はします。我々は受け皿としてはバリアフリー化しているマリーナがあるということと、海のことに詳しいスタッフがたくさんいますし、何とかやれますけれども。安全の確保もできます。船も操れます。でも、一般の人がそういう子供たちに海のいいところを教えたいといっても、それはやっぱりできない。そういう仕組みを何らかの形で探さないと無理なので、それをやっています。

三好 ありがとうございます。

鈴木さん、逆にボランティアで頑張っている人、若いお二人に何かありますか。今の穴原さんの質問ですが。

鈴木 活動に関していいますと、実は自分も始めたころに、先ほど言ったように教員をやっていますから、「教員が何でそんなことをやらなきゃいけないんだ。子供たちを使って無理やり浜の掃除をさせているんじゃないの?」と言われたのがありました。なかなか理解してもらえずに、地域のほうに子供たちが手紙を持っていくと、子供たちに無理やりあれを配らせているとか、いろいろ言われ続けてきたんですが、活動を始めたときの子供たちが、小学校の3年間、中学校の3年間、6年間ずっと活動をやめない。毎月ちゃんとやろうという彼らの熱意がベースにあります。それを自分は支えてきただけなんですけれど。

その後、続けていくということになったときに、やはりごみ拾いだけではできない。楽しくない。そうなると、海のおよさを感じてもらうためには体験活動を入れたほうがいい。体験活動を入れようとすると、まずお金がかかる。それから、ごみ拾いにも、多くの人たちに来てもらうためにチラシを配るといことになると、お金がかかる。そういうときに、自分の給料で賄うことは全くできませんので、いろんな企業さんが公募している助成金制度に応募したりしてやっています。本年度はみなと総研さんからもいただいていたりで、毎年そういう助成金に応募して、何とか資金を確保するというのが、今のところは一番厳しいところですが、自分も後先短いので、将来的に今までやってきたものをもとに、食べていけるようになるといいかなと半分思いますが、でも、ボランティアでやっていくのも一つ価値があるかなともちょっと思っているんで、何とか今ここに見える方で助成金をいただける方はぜひ。(笑)

特に行政のほうからの助成金はほとんどないので。行政からはあまりありません。この中で出すと怒られそうですが、愛知県には藤前干潟というのがあって、藤前干潟を守る会が環境省の声がかりでできて動いていますので、環境省からも、愛知県からもお金がおりています。15年やっている亀の子隊には来ません。(笑) わずかでも来ていただけるとうれしいなと思います。

三好 ありがとうございます。

鈴木さん、もう既に15年やっていらっしゃるんですけど、逆に先生のお仲間で、鈴木さんの後を継ぐ方はどうでしょうか。いらっしゃいますか。

鈴木 毎年ここへ来るとそういうことをよく言われるんですけど、なかなかないんですね。どうして

も、地域性もあるのかもわからないんですけど、休日の部活動もすごく盛んなところで、一生懸命やっているということもあって、なかなか時間をとれない。それから、一つの地域性もあって、正直、地元の悪口を言うようで本当に嫌なんですけど、なかなか文化が育たない。歴史的には非常に文化の香りの高いところですが、新たな文化がなかなか育っていかないというところがあって、なかなか芽が伸びてくれません。無理に引っ張ると、かえって長続きしないものですから、来るまで待とうかなという感じではいます。

ただ、もう6割以上の先生たちは、自分がこういう亀の子隊ということでやっていることは知っておると思うんですけど、ごみ拾いひとつ、来てくれることはないです。ただ、幸いにも活動を始めたときの子供たちが25歳になります。今、地元に戻って、仕事を、農業をしていますその子たちが3人、4人、年に1~2回、呼び出すと来てくれますので、もう2~3年のうちに少しずつ現場での活動なんかは渡していきながら、後継者をつくっていったらなとは思っています。

三好 ありがとうございます。

それでは、次の質問で、これはわかり切っているところかも知れないんですけど、改めて「海の魅力とは何か」と聞かれたら、何とお答えするでしょうか。堀さん、サーフィンじゃなくて……。

堀 それは書かなくていいですか。

三好 では、書いていただけますか。改めて、「海の魅力は？」と。わかっているし、しゃべり出したらとまらない人たちばかりだと思うんですが。

また早いんですね。

堀 瞬発力、命ですから。

三好 サーファーは瞬発力が命。「チェンジ」ですね。では、どうぞ。皆さん、書いているから、どうぞ。しゃべる権利がありますよ。

堀 自分はこれだと思っています。絶えず海は動いているんですね。自分もそうありたいんですね。何だかお偉い哲学者の誰々さんとかも、変化できる人間が実は一番たくましいとか、そんなことも言っていました。僕もそう思っています。

例えばサーフンは気持ちいいからやっているわけなんですけど、もう少しロジカルに説明すれば、同じ横乗り系のスポーツにスノーボード、スケートボードというのがありますね。それでサーフィン。スケートボードは地面がアスファルト。スノーボードは雪です。動かないんですよ。でも、サーフンは動くんです。こっちも動く。動いているものと動いているものの呼吸がぴたっと合ったときがあるわけなんです。これは、やったことがある方はわかるんですけど、このぴたっと合ったときは、「フォー！」という感じなわけですよ。(笑) そういう感じですね。

三好 堀さんの感覚がわかる、いわゆるサーフィンをしたことのある方は会場で、お手を挙げていただいていいですか。挙げた感じだと4人ぐらいですかね。まだ少ないですね。増やさないといけないですね。

あとは、大塚さんが、「わからない」と。

大塚 魅力がわからないじゃなくて、海のことが余りよくわからないというようなことですかね。例えばおいしいものがあるって、広々としていて、何かいいとか、いろいろあるんですけど、全部わかり切っていない神秘さみたいなものがあると、ちょっとロマンチックだったりするじゃないですか。

そういうのがあるし、世の中の人ほとんど海のことを、目の前にありながらも知らない、わからないというところは、教えてあげること、例えばさっきのなりわいの話が出ましたけど、ビジネスチャンスがあるのか。そういった要素も多分にあるんじゃないかなと。可能性がいっぱいあるという意味も含めて、わからないということです。

三好 神秘的なところですね。

大野木さんは、「怖い自然」ですか。

大野木 そうです。自然というのは物すごく怖いというのが、ある部分、魅力が実はあって。私も、だから、実は海のことを知らない。だから、その海の怖さが魅力でもあるなど。それを知らずして子供たちが大きくなっていくのは怖いし、それに近づけない親や学校の先生が怖いし。そういう意味では、海の魅力というのは、怖いことが魅力なのと違うかという気がします。表現としては魅力です。

三好 おっしゃるとおりだと思いますね。CNAC海のボランティアのこの協議会も、この5年間やってきた実際の活動を振り返ってみると、普及なんですけど、そのためにやってきたことは、安全に関することを実際にやらせていただきました。「海あそび安全講座」という小冊子をつくりまして、残念ながら12年度で配布が全部終わってしまっている状況ですけど。やはり怖いからこそ、皆さんが海離れになっている。でも、それを解決する一つの手段としては、安全に活動できるお手伝いをしようというのが、CNACとしては今までやってきたところがありますのでね。魅力が、相反するところがあると思うんですが、そういう状況ですということです。

それでは、鈴木さん、「心和む癒やし」ですね。

鈴木 こうしてこの会に来ると、非常に心苦しいんですが、自分自身としては潜れませんし、サーフィンはできませんし、海にかかわって直接的に何かできるということが何もないんですね。渥美半島では自分たちの子供のころから、海に遊びに行くな、子供たちだけで遊びに行くな、海は危険だからというふうに教えられてきたところがあるんです。それから、現実論として、今の子供たちも海に遊びに行くことはほとんどありません。ですから、自分もずっと海を表面的に見てきています。

渥美半島は、朝日はもちろん太平洋から望めますし、夕日もきれいに伊勢のほうへ落ちていく夕日が見られますし、西の浜は一年中、夕日はずっと海に落ちていきます。夕日が季節によって移動していく様子もすごくよくわかります。そういう夕日などを見ていたら、じっとしていると波の音が変わっていく。一年中、音が違いますね。だから、ずっと波を見ているだけでも変化していく。自分にとってはそういう意味ではとても心和む場所で、何かあると一人でドライブして、30分ぐらいで行けるんですけど、見ているということがよくある場所ではあります。そういう意味でいくと、多くの人にとっても、亀の子隊のホームページにも書いてありますが、心痛めている人なんかは海をじっと見に来て癒やしをするといいんじゃないかなと思います。

三好 海辺の活動というのは、先ほど堀さんからは、サーフィンの魅力みたいなところを言っていたけど、今、鈴木さんがおっしゃったように、海の中に入らなければいけないわけでは決していないんですね。今の、海を眺めて、海辺に行くことだけで和む、そういった効果があるというのも、海辺の活動の一つの大きな目的であっていいわけですね。ですから、逆に、入れない人たちは、そうやって海に親しむ。先ほどのバリアフリーまつりの場合は、諦めていたような方々、いわゆるハンディキャップの方々が、そのマリーナの中でおにぎりを食べることも、今まではできないと思

っていた。それができる。できたことによって、アクセスディンギーに乗れなくてもいい。それがさらに乗れてしまうと、もっと広がっていく。そういったいろんな活動が逆に海辺の活動の中にはあるというのがあるんじゃないでしょうかね。その辺のところでCNACとしても、「海と生きる」という生き方の中でいろんな方法論があるんだろうというのを、今再検討しているところでございます。

それでは、じっと考えて最後に書いていただいた穴原さん。「生きているおもしろさ」。

穴原 海の魅力と言われても、本当にぱっと言葉が浮かばないというか、難しいなと思ひまして、まだまだ私も未熟者なので、海の魅力を言葉であらわせるほど、海をまだ理解し切れていないのかなと思ひているんですが、やはり感覚的に島で海の近くで生きてきたので、海の中には生きている生き物がうじゃうじゃいて、ただ、目に見える、ぱっと見て目に入ってくるものだけじゃなくて、岩のすき間とか、砂の間とか、遠くの海の奥のほうとか、そういうところで生きているものが、自分が目を凝らせば凝らすほど見えてくるものだと思ひています。しかも、生き生きとした姿にいつでも出会うことができるというおもしろさ。

それと、堀さんの話はさすがだなと思ひたんですけれども、変化し続けているもの。毎日同じ海はないというか。けれども、いつも必ず毎日そこに海はあるし、同じように毎日波は打ち寄せるし、だけど、その打ち寄せてくる波に同じものはない。常に変わらないんだけど、常に変化し続けているという海は、生き物でもあり、自分たちもここで生きて、ここで生活をしている。

三宅島の島の人間は、いつも生活の中で風の話をするんですね。きょうは風が西だとか、東だとか。こちらでも、きょうは天気がいいですねとか、晴れていますねとか、お天気の話はちょっとした時にも使うとは思ひますけれども、島の人は必ず風を言うんですね。しかも、それがあしたには西に変わるとか、きょうは東の風だからどうのこうのとか。それは海にもかかわってきているので、きょうは西だからこっちの海には入れないとか、こっちの海の磯場が落ちつくから、磯場で貝をとりに行こうとか。そういう生活に密着した表現が海のおもしろさの一つでもあるし、自然な当たり前の、当たり前だからなかなか気づきにくい部分もあるかもしれないんですけど、そういうのが魅力なのかなと思ひます。

三好 ありがとうございます。

会場の皆さんから、私はこういうところが好きなんだとか、魅力なんだというご発言はいかがですか。せっくなので。私はこういう活動を実はしているんですとか、PRでも結構ですから。いらっしやいませんか。こちらからご指名してもよろしいでしょうか。

せっくなので千葉県からお越しの竹内さん。

竹内 僕ですか。

三好 いかがでしょうか。

竹内 何ですか。海の魅力ですか。

三好 ええ。館山の宣伝でも構いませんが。

竹内 ご指名ですので。南房総の館山から来ました竹内と申します。

海の魅力ですか。話が長くなってしまっているんですか。(笑)

三好 途中でとめますから。

竹内 生まれは東京で、この近所で生まれたんですけれど、たまたまこの近所に漁師がいて、漁師

の友達がいまして、そういう友達と海で遊んでばかりいて、海が好きだなと本当に思っていたら、南房総の果てまで行ってしまったということなんですけれども。

何が魅力というと、海へ行くととにかくおもしろいんですね。僕は生き物がすごく好きなので、とにかく生き物とか、魚とか、そういうのをいじっているのがすごく好きで、そういうものと本当に身近に触れ合えることがこよなく楽しいみたいな。そういうことをみんなに教えてあげたら、さぞかし楽しいだろうなと思っていたので、こんな——こんなと言ってもあまりよく知らないかもしれないんですけど、海でいろんな活動を始めることになりました。僕としてはそんなところで、館山の海はなかなかおもしろいので、ぜひおいでください。

三好 短い。

竹内 短いですか。

三好 せっかくなので、館山の港の……

竹内 ああ、そういう話。

三好 逆に海のカミみたいな。

竹内 どんな活動をしているかということ、それこそ皆さんがおやりになっているビーチコーミングだとか、海の中を泳いでみるシュノーケリング体験とか、そういうことをやっています、今回のこのフォーラムは後援が国土交通省さんということで、館山というところに新しい栈橋ができて、すごくでっかい栈橋なんですけど、そこで年に1回、シュノーケリングをやっています。実はそこにもサンゴが生きていて、まだ何年もたって……。あれは何年だっけ。3年ぐらいたったんでしたっけ。そんなものなんですけど、ソフトコーラルがついていたりして、地元の子供たちをそこに連れていったりして、人工物でもそうやっていろんなことができるというような活動を、そこは年に1回ですけど。これからは年に何回かは、大塚さんがおっしゃっていたように、チャンスがありそうな感じもするので、続けていければと思っています。

三好 済みません、ご指名をしまして。

今お話がありましたように、千葉県の館山の場所は、会場の皆さんはおわかりですか。そこですごく大型の船がつけるような栈橋ができて、そこは橋脚で下があいているような形の栈橋をして、その橋脚にソフトコーラルが3年の間でついたというのがあるそうなんです。そういった人工物が無理やり自然の中にできてしまったんだけど、その中で逆に海の自然は変わっていく。それを逆に活動として竹内さんもやっていたらというところのご報告でございました。

いろんな活動をされていると思うんですが、どうでしょうか、せっかくなので。自分の活動を含めてということですが、よろしいですか。

全体に関して皆さんのほうから5人の方々にご質問等はどうでしょうか。改めて聞いてみたいということがありますか。ございませんか。

山根 みなと総研の山根といいますけれども、一番最初にお話しになった穴原さんに、モイヤー先生の思い出を語られたんですけど、恐らくこの皆さんの活動が次の世代に伝わっていかうとすると、今の皆さんの中にモイヤー先生のような、次の子供たちが、あのときあのおじちゃんがいたとか、あのおばちゃんがいたとかというふうに思ってくれるような何かが必要なんだろうな。さっきお金という話もありましたけど、恐らくお金も必要なんですけど、その前に、この活動を継いでい

かなきゃいけないというパッションといいますか、忘れてはいけないみたいな、そういうものを次の世代に早く伝えておかないと、今集まっている人たちは何とかやりくりしてきょうまでできていますが、次に向けて何かモイヤー先生が思われていたものが、例えば穴原さんの何かに引き継がれて、今、穴原さんを見ている子供たちが、穴原さんを通してモイヤー先生の思いみたいなのが流れていっているかどうかというのが、非常に興味があるといえますか、聞きたいといえますか。逆に言うと、自分たち自身がそうなれているかどうか。ちょっとそんなことを教えていただければ。

きょう5人の方が同じ活動をしていて、今、自分は頑張っているんだけど、自分がいなくなった後、どうなっているかといったときに、受け継いでいる方が育っているかどうか、コメントをいただければ。

三好 それでは、まず穴原さん。

穴原 ありがとうございます。

本当にモイヤー先生の実在というのは、私にとっても、島にとっても大きかったというのは確かだし、モイヤー先生は、皆さんもご存じのとおり、世界的な研究者というお立場もそうだし、お人柄もそうでしたし、そういう情熱もやはりずば抜けていたことがあったんだと思います。今になってそういうふうに変更するということもあるんですけども、子供ながらにしてあまり難しい、この人はすごい研究者だとか、そういう意識はせずとも、この人からの言葉で説明されている海の話とか、生き物の話のおもしろさというのは、やはり子供心を引きつけるものがすごくあったかなと思っています。

それで、今やはり私もモイヤー先生のようになれたらというのは、正直、すごくありますが、さらに正直なところを言うと、モイヤー先生のそうした、三宅で活動しているオーシャンファミリーの海野さんとか、三好さんもそうですけれども、その偉大な先輩方の後を引き継げるようになるのは、本当にすごくはかり知れないことだなと。まだまだ私のような身分では到底追いつかないものだと思います。全く同じ存在になれるかといったら、多分同じところまでは到達できない気がするんですけども、今の時代に合ったような私なりのメッセージをさらに加えて、モイヤー先生たちから受け取ったメッセージにさらに自分の思いを加えて、自分なりの、子供たちにとって心に残る存在になればいいなと思って、今活動はしています。

この海の活動に限らず、私はこういうネイチャーガイドの仕事以外は、冬場の時期は観光の閑散期になりますので、学校のアシスタントティーチャーというような仕事も学校からの依頼でさせてもらっているのですが、日常的に島の子供たちと触れ合う機会を常につくろうとしているんですけども。今、子供たちにとって私がどういう存在に映っているかというのは、正直、私も聞いてみたいぐらいですけども、今ガイドをして、たまに新聞で三宅島の紹介をするときに私を紹介する記事が載ったり、テレビの中でも三宅島の自然が紹介されるときに私が案内役で登場させてもらったりしている姿を島の子供たちが見て、それを一つの憧れのような存在になってもらえたら、また次の世代につながっていくんじゃないかなと思っています。今、子供たちや後輩たちにも、自分の姿を見て、全く同じようになりたいと思ってもらわなくても、島に帰ってこいというわけでもないんですけども、どこかしらで心の中に、三宅島で、私は島の中では「ナツねえ」と呼ばれているんですけども、「ナツねえだったら、こうやったほうがいいかな」とか、どこかしらでかかわってほしいなと思って。子供たちに一番私の望んでいるところは、そういうことだろうなと思っています。まだまだそこには行きつ

いていないと思うので、それを目指して頑張っていきたいと思います。

三好 ありがとうございます。かなり着実に島の中では存在感が今できつつあると思いますね。

先ほど鈴木先生は、もう10年前の生徒が今、仕事で戻ってきて、一緒にやってくれているというような話があったんですが、今みたいところでまたその辺を補足していただいて、次の代につなげるというところの思いをもう一度お話ししていただいてよろしいですか。

鈴木 一番悩んでいる問題です。正直言って、自分の仕事もあと2年で終わりになります。そうすると、今、学校という現場にいて、事務所を構えなくても印刷機はある、プリンターはある、いろんなものがある……。もちろん利用料を払っています。(笑)ただではやっていませんが。退職すると、事務所がなくなっていくわけですね。そういう活動をつなげていくにはそういう場所も必要なんですけど、それよりも、今、質問されたように、やはり気持ちを引き継いで活動を継続していける子供たちをどう育てていくのかということが非常に大事なところだなという気を持っています。

ただ、亀の子隊とすると、5年も6年も7年もずっと入っている子がいます。その子供たちが、毎月の活動には来られなくても、何かあると顔を出してくれたり、声をかけてくれたり。実は東日本大震災に4回も活動支援に行きましたが、その4回とも1人の女の子と一緒にきました。そういう子供たちがいるので、その子供たちが大人になったときに、何とかうまくバトンを渡すことができるというなど。そのバトンの渡し方をどこでどうやろうかなというのを今一緒に考えている、そんなところです。

三好 ありがとうございます。

まだまだばりばりで動いていらっしゃる大塚さんは、その辺はどうお考えですか。第2の大塚はいらっしゃいますか。

大塚 僕は、例えば説明したりすると、「どこかのプランナーさんなんですか」みたいな色眼鏡をかけて見られるようになってきているんじゃないかなという自分がいますので、そういうカリスマ性は多分持てないと思っています。例えば積丹のさっきお話しした事例でいくと、基本にあるのは、地元の漁師さんが子供たちに漁業のよさや地元の魅力を伝えていきたいというのが根底にあって、僕の役目というのは、彼らは思いがあるんだけど、「こういうふうなやり方だったらどうですか」とか、「こういうお金を使ってみたらどうですか」というのが、多分私の役目なんじゃないかなと思って、活動はしています。

ですので、漁師さんの中からカリスマ的な人が出てくるというのは、それはそのときの話だと思うんですけども、何かそういう思いを持たれた漁師さんの若い方というのは確実にふえてきているという話もあって、そういうのが機運としてずっと醸成されてくるというのがあれば、将来はそんなに悲観しなくてもいいんじゃないかなとは思っています。

三好 ありがとうございます。

大野木さん、いかがですか。NPOの立場と、先ほどのマリーナというか、そちらのほうの立場もある中で、例えばこのNPO海の達人の次の世代みたいな形のところは どうお考えですか。

大野木 今活動している「海のバリアフリーまつり」に関しては年1回ですけど、これには、先ほど言いましたように団体で来るようになりましたので、それに障害者も、健常者の子供たちも、それについてくる親も一緒に来るわけです。職員も。だから、今まで縁のなかった、まさかと思う人が、

海へ来るきっかけができました。だから、我々がどうこうよりも、向こうが求めるように今なっていると思うんです。だから、今後、多分、親が子供と一緒に、健常者と障害者が一緒に海へ行くということを知った以上は、多分彼らが求めてくるだろうと思うんですね。

それと、月2回行っているセイラビリティ活動ですけれども、こちらだと江ノ島や横浜などである程度していますが、中部では三重県だけなんですけれども、実は三重県に3カ所あって、しかもその三重県で3つの団体が活動しています。昨年からはセイラビリティ三重というのをもう一つつくって、一緒に活動をし始めました。そこにはいろいろな、若い人からお年寄りまで結構いますけれども、彼らがそうやって動くことによって間違いなく次の世代が出てくる。何よりも海を知る子供や親がふえてきたということが、多分絶えないかなという気はして、そう思わないといけないんだと思ってやっています。

三好 ありがとうございます。

堀さんはまだまだお若いんですけど、逆に今1歳と3歳のお子さんがいらっしゃるということで、自分の子供に対してでもいいんですが、次世代の子供たちに何かお考えはありますか。

堀 子供から直接感想をいただくという機会がなかなかないので、うちでは冒険合宿というのを春夏秋冬やっているんですね。そのターゲットというのが小学生で、お父さん、お母さんから必ず感想を送ってもらうようにしているんです。まず、その感想を今スマホで自分のホームページに書いてあるのを、まず読んでみたいと思うんですね。

2012年の10月、ついこの間の秋合宿に参加した男の子、小学4年生のお母さんなんですけど、「秋合宿では大変お世話になりました。Kの感想は」——このKというのは、一応名前を出していないので、K君ですが——「とにかく南伊豆は、自然がいっぱいすごいです！全部楽しかったけど、特に楽しかったのは、シーカヤックと稲刈りです。食べ物が、超美味しい！又皆に会いたい・南伊豆の人達は皆やさしいです。友達が出来て嬉しい！・・と長々続くのですが、辻堂に帰ってきた子供達4人の表情と雰囲気、すぐに、あ〜行かせて良かったと感じました。Kの話を知ると、この合宿で、人っていないな・自然って美しいな・・と感じられたようです。帰ってから、冒険クラブの帽子をKはとても大事にして、地図を見て南伊豆を探したりしてます。南伊豆に知り合いがいるってすてきですよ。合宿から帰って3日後、授業参観がありました。堂々と手をあげ、自信たっぷり発言する息子を初めて見ました。終わってから、どうしちゃったの？って聞いたら、「合宿のお陰かな」と答えました。本当にびっくりです。いつか大人になるKに今しか出来ない経験をさせてくれたキャプテン、南伊豆でお世話になった方達、お友達に感謝の気持ちで一杯です。又お会い出来るのを楽しみにしています」ということで、これは本当の話なんです。

これを僕はもらったときに、この感想をいただいたときにすごくうれしかったのは、単純に海がいいとか、気持ちよかったとか、そういうことじゃなくて、授業参観で堂々と手を挙げたとか、人間の奥の部分に響いてしまったんだなという、自分でも予期しなかった出来事が彼の中で生まれていて、僕はそういうことにすごく感動していて、感動させられて、また頑張ろう、もっとカッコいいキャプテンになっちゃうぞとか、そういうふうに思っていて。だから、確実に伝わっていると思います。

ただ、東海大学の環境社会学科の18歳、19歳の、いわゆる大人になろうとしている学生たちの意見を聞くと、「将来、何になりたい？」と聞くと、やっぱり安定した収入を求めたがるんですよ。それ

は僕も同じです。安定と不安定のどっちがいいかといったら、それは安定のほうがいいに決まっているんですね。それは家族がいればなおのことです。なので、彼らが僕のような存在、ネイチャーガイドみたいな職種を選ぶようになるには、いろんなハードルを僕が今ぶち壊していかなくてはならないと、そのためにはまずお金もやっぱり大事だなとすごく思っています。すごく現実的な問題で。

もう一つは、例えばボブ・マーリがすごいのは、まさにラブ&ピースなんですけど、西と東の戦争を彼はとめたわけですよ。どうとめたかという、彼は歌でとめたわけですよ。それはどういうことかという、彼のライブ会場に西と東のおやじさんと呼んで、目の前でピースと言って握手をさせたんですね。それはすごいなと、僕はそれは、僕にかえて話をすれば、漁師と林業の親方同士を僕がステージをつくって握手をさせるというのが、僕の中ではすごく必要な気がして。南伊豆でいいんですけど、南伊豆という小さなエリアでいいんですけど、漁師の一番の親方、林業の一番の親方、直也だったら幾らでも協力してやるぜと言ってもらえるような俺ができないと、きっと子供たちはキャプテンになりたくない俺は思っている。僕らはまだ若いですから、まだまだ鍛えていかないと、そんな夢を見せられない。そういう感じですね。

三好 ありがとうございます。

キャプテンというのは堀さんのことですね。

堀 そうです。

三好 ありがとうございます。

今、山根さんのご質問で、次世代という形で、子供たちというような対象の話が出ましたが、いろんな活動がある中で、当然、海に関する、いわゆる海の中、ビーチも含めてですけど、活動そのものが子供たちに対して大きな効果があるというのは、多分会場の皆さんは当然ご理解いただいていると思いますが、一般的にも当然、体験活動、自然体験活動という言葉が大分広まってきておりますので、その意義は今さら言うことではないと思うんですが、必ずそこに、活動に、人がいるということは多分間違いないんですね。今のキャプテンの存在、それからモイヤー先生の存在、逆に今の穴原さんの存在だとか。必ず子供たちが見ているのは、海の自然だけではなくて、そこで一緒にいてくれる、多分我々大人をかなり今の子供たちは見えていますよね。そういった意味では、どういう大人を見せるかみたいなのが、多分体験活動の中ではとても今重要なところで。

ある意味でうちは新宿ですから、本当に23区内のお子様を対象になっていまして、非常に情報過多です。それから、いい意味で非常に大人慣れしている。ですから、そういった子供たちに直接体験の中で、真実は何かみたいところをしっかりと伝えることが、いわゆる学校生活の中で逆に少なくなっている。そういう中で我々の存在が多分あるのかなと思っています。堀さん、穴原さんは、今、非常にいい、子供たちにとっては、格好いいお兄ちゃん、お姉ちゃんになっているだろうと思うんですけどね。

それでは、お時間のほうもあれですから、最後に、テーマ「今、海と生きる、とは」ということですが、「海と生きるために必要なものは何？」と聞かれたら、何とお答えでしょうか。最後の質問でございます。どうぞお書きください。海と生きるとは、そのために必要なものは何でしょうか。当然、お金というのでも出てくるわけですね。

今度は穴原さんが早いんですね。大野木さんが早かった。海と生きていくために必要なものは何でしょうかと聞かれた皆さんが答えになられました。

では、穴原さんのほうからどうですか。「受け入れる心とわくわく……」。ハートマークは何と読むんですか。

穴原 心です。

三好 心ですね。

穴原 海というのはやっぱり、皆さんもご存じのとおり、人間ではどうすることもできないはかり知れない力が、時には先ほど大野木さんのお話にもありました怖さとかがあります。特に島の場合ですと、海が荒れば、船が欠航して、そうすると自分が東京に用事があるって行きたい場合にも行けなくなったり、荷物を東京に出さなきゃいけないときにも出せなかったり、あとは東京からも物資が来ないので、だんだんお店に品が無くなるとか、そういうどうすることもできないけれども、それはどうすることもできないわけなので、受け入れるしかないんですね。そういうときに誰を責めることもできないので、それを受け入れる。また、海で仕事をしている漁師さんは、特に海が荒れたら仕事ができない。だけど、そのときにそれを、自分の心を荒立たすことなく、自然のリズムに即して生きる。人間というのは今この時代、何でも思いどおりになる時代じゃないですか。特にこういう都会にいれば、何でも手に入るし、思いどおりにいって、時間どおりに電車も来るし、ちょっとでも遅れると、いら立ってしまったという時代の中で、海の近くで、海に即して生活していると、そういう受け入れる心があって当然というか、穏やかな気持ちで生きることができる。ある意味でそれは本来の自然の中で生きている人間らしいことじゃないかなと思っているので、そういう心が大事なかと。

あとは、おもしろい、いろんな未知なる生き物と出会えたり、すごく変化のある波を楽しめたり、そういうところで出会える人であったり、そういうわくわくなところがいつでもあると、海と生きるのはとても豊かになるし、楽しくなるし、魅力的にいつまでもなっていくんじゃないかなと思っています。

三好 ありがとうございます。

堀さん、お願いします。「子供心」。

堀 はい。自分はまだ子育てにかかわって3年目の、父親としては本当にまだまだ新米なんですけど、子供と一緒に海でも山でも川でも遊んでいると、逆にこっちがびっくりしてしまうというか、本当に無垢で、素直で、真っすぐでシンプルで、こういう世界だったら本当にピースなんだろうなと僕は思うんですね。なので、僕たちが住んでいる日本というのはすごく複雑で、すごくうそばかりの世界で、それは鬱病も出るよという話ですよ。(笑) だからこそ自然の中に来て、安らいでほしいわけですけど。だから、こちらがたくさん学んでいますね。なので、子供心と書きました。

三好 ありがとうございます。

それでは、鈴木さん。「海への感謝」ですか。

鈴木 発表の中でも紹介してもらいましたが、西の浜のクリーンアップ活動をずっと15年続けてきて、雨で中止になったことは本当に数回しかないんですね。前日まですごく雨だったのが、朝ぱたっとやむとか、活動の2時間ほど雲間が切れて活動ができるとかということが何度もあります。何となくそういうのを続けてくると、海や空の神様が応援してくれているのかなというような気持ち

にさえもなります。

先ほども海の魅力で癒やしの場所だというふうに書きましたが、やはり海はいろんな姿があると思うんですね。体験して楽しむ場所であり、海に入らなくても見ているだけで癒やされる場でもあり、海を生活の場としている人たちにとっては食料を得る場であり、かつてこの渥美半島は、渥美の言葉で小さなアシやヨシのことをコウと言うんですね。燃やすものができるコウというものでした。燃料をとる場所でもあったわけです。そういう意味でいうと、いろんな意味で海にもっと感謝をしていくべきかなと。ずっとそうして生きてきたんじゃないかなと。終わりに書かせていただいたメッセージの中にもそういう言葉を入れさせてもらっているんですが、やはり改めて海というものを見直して、我々の生活の中で感謝をしていく場所ではないのかなと思っています。

今この時期、三河湾だけではないかもしれませんが、海はとてもきれいになります。透明感も増す時期です。ところが、反面、西風が来て、たくさんのごみが今一番寄るときです。でも、自分はいつもこの時期に海に様子を見に行くときに思うのは、たくさん出していいよと。海の自浄作用として、海の中にたまっているごみをどんどん出して浜に捨てていいよと。私たちができることはそれしかない。拾って海を助けてやれるというのはおこがましいですが、海に感謝する反面、そうして海の中にあるごみを吐き出してくれれば、何とかきれいにして海に戻っていかないようにしますということだけは、いつもそっと思いながら活動をしているということで、やはり感謝をすることができればいいなと思います。

三好 ありがとうございます。

大野木さんは、「海から学ぶ」ですか。

大野木 海と生きるということは、海の恩恵を知るというか、我々が海に生かされておるというのを、もうちょっと具体的に知るべきですし、教えるべきかな、伝えるべきかなという気はします。そういう意味では、森、川、海の循環の制度についてもそうでしょうし、環境の問題もそうでしょうし、海の怖さもそうです。そういうことを教えながら、我々は海なしでは生きていけないよ、海の恩恵を受けて生きているんだよということを、何らかの形でもうちょっとやさしく、楽しく子供たちに教えられるのかなという気がします。

三好 ありがとうございます。

大塚さんは、これは「わざ」ですか。

大塚 なりわい力と——「力」じゃなくて「りょく」ですが、書いたんですけど、海に生きるというのを考えてみると、海でも都市部の海というのと、地方の海というのがあるんですね。都市部の海というのは非日常的に楽しかったらいいとか、産業的に既に利用されているので、そっちのほうは置いておいて、地方の海の空間とか、そういう産業も含めた場所というのは、日常の暮らしがそこであるというのと、自分たちのしている暮らしと仕事というのはすごく近い距離感にあるというのが地方の海なんじゃないかなと思うんですね。そこで暮らしということを考えれば、そこでいかにしてお金を稼ぐかというものとなりわいをどうやってつくり上げるかという能力があって初めてそこに長く住めるわけですね。

ただ、地方に行くと、例えばお魚をもらいましたとか、近所の世話焼きの人がいて、実は都市部よりもお金をもらっていないんだけど貯金がふえたとか、実際にそういう事例はたくさんありますから、

少ないお金の中でも上手に自分の自己実現ができるようななりわいをつくっていくという力を、これは都市に住むよりもすごく難しいことなのかもしれないですけど、ただ海が好きだよというだけとかなかなか5年とかしかいられなかったりしますが、10年、20年、地域で暮らしていくには力が要るんじゃないかなということで、「なりわい力」と書いてみました。

三好 ありがとうございます。

そろそろ時間になるんですが、会場の皆さんからご質問はいかがですか。よろしいですか。

今、大塚さんのほうからも、なりわい力ということをお話いただきましたけど、特に大塚さんの場合は地域性に富んだ活動をされていますので、そういった中での地域力というか、生きるというのが仕事としてという形のことに焦点を当てていただいたようですけど、その地域の中でのいろんな情報や人をうまく使って行って、なりわいをつくっていくといったことがとても重要だし、可能性もあるというご提案ですね。ぜひそういった形の……。今、大塚さんは積丹のほうでやっていらっしゃるような形は、積丹以外でも北海道の中でまた次のところは候補地はないんですか。

大塚 余り遠いとよく行けないので、遠いところはやらないようにしているんですけど。

三好 内緒で、今考えているところはありますか。

大塚 例えば小樽も実はそうで、小樽市というのは重要港湾だった大きな港があるんですね。港町と言われているんですけど、実は港というか、海を新しい使い方をすることが全くやられていなかったという地域でもありますから、これを、例えば観光利用であるとか、水産の付加価値化みたいなことをどうやっていくのかという話はさせてもらっています。

三好 地域の活性化や体験活動を例えばなりわいとしている者もこの中にいますけど、今、自然学校というのが全国にいっぱいあるのは、皆さん、ご存じですか。自然観光と……。例えばうちは野外教育事業所という肩書をつけていますが、年間を通じて自然に関する活動をしている、それから専門的な職員が一応いるというような団体が、2011年度の調査で今、日本に3,000を超えているという話なんですね。

その自然観光のいろんな役割の中に、実は大塚さんが話されたように、単なる体験プログラムを提供することだけが自然観光の役割ではなくて、地域の中での橋渡し役というか、人と人とを結びつけるお手伝いをしたり、地域の宝を逆に見つける手伝いをしたり、そういったふだんその地域にいる方には見つけられない、気づかないようなものに、「これはすごいんですよ」という形のヒントを与えて、そこに地域の方々が、「ああ、そうなんだ」と。積丹も実はそうだったんじゃないかと思うんですね。だから、ふだん見ている海と違う海に地元の方が気づくと、変わっていく。

暮らしというお話もありましたけど、そういったところにかかわることが、可能性が……。ただ、今までの何とか業という中に、実は自然学校は入っていないんですね。業界でもない。だけど、でも、地域としては役割が今、完全にできている場所もある。これから穴原さんは三宅島の中でそういったいろんな……。だから、仕事の内容は多分1つではないですよ。ですから、そういった意味でいろんなことをしていくことが求められますが、それで生きていくこと、いわゆるなりわいとしていくことの可能性というのは、今随分あるのではないかと考えております。

その中で、例えばまだまだ穴原さんは未熟だというお話ですけど、今、モイヤー先生の時代、あるいは我々の時代との大きな違いは、ネットワークじゃないですか。今は島にいても、ネットがあれば

つながれるものが、ツールが、いっぱいありますよね。ですから、いろんな意味で、東京にいても応援してくれる方がいるし、情報も当然入ってくるし、その辺は本当に時代の変化の中で自分だけが頑張る必要はないし、自分を鍛えながら、いろんな人の力を利用していくということをぜひ考えていけば……。あれもこれもしよいこむと本当に大変ですよ。我々が一人でやってきたという時代には、そんな余裕自体ないし、ツールもなかったので、自分で頑張るしかないという時代がありましたけど、今は本当にそういう形で物がありますよね。きょうこの会場に来られた方々との新しいネットワークもできればいいと思っていますが、

あとは、堀さんのお話の子供心というのは、自然学校の方々がよく読んでいる本の中で、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」という本がございますね。ご存じの方も多いと思いますが、そのセンス・オブ・ワンダー、不思議を感じる心が大切だ。それは逆に大人になると忘れていく。子供のころはあったのに、だんだん大人になっていくとそれがなくなっていく。そうじゃなくて、そういった純粋な心をずっと持ち続ける大人でいることもとても大事なんだよという形のメッセージを、レイチェル・カーソンさんというもう50年以上前の方ですけど、その方が今そういうメッセージを残されているというの、また今の時代にマッチしているのかなと。子供心を持ちながら、なおかつ、大人として活動していただければと思います。

CNACとしましては、今回の全国フォーラムのテーマとして「海と生きる」を挙げましたけれども、CNACとしても、やはり全国団体ですので、皆さん方を支援していきたいなということは考えているんですね。13年度、平成25年度の事業計画を今考えているところですが、一応今までの5年間を踏まえて、次はこんな運動をしていこうよというのを一応今挙げて、具体的に何をするのかということ今考えているんですが、副代表理事の神保さんに、3つの「広げよう」運動を、CNACとしてはこんなことを13年度やっていきますので、ぜひ皆さん、ご参加いただきたいというようなアピールをしていただきたいと思います。

神保 副代表理事の神保と申します。

午前中、理事会がありまして、その中でCNACとして、設立5年を経て、今後どういうあり方、どういなかかわり方をしていこうかという議論の中で、3つの「広げよう」運動というのがあります。

何かというと、まずは普及ですね。海辺でのこういう自然体験活動をより普及していくために、そのターゲットではないですけど、やはりこれからの未来を担う子供たち、具体的には学校教育の分野とより連携を図っていけないだろうかということに力を入れていこうということになるかと思います。平成23年度から小学校では、ご存じの方も多いと思いますが、新学習指導要領というのが始まりまして、要は先生方のマニュアルのようなものですけど、その中ではっきりと自然体験活動をやっていきなさいというのが文言として入りました。ただ、その半面、学校では授業時間数の確保が非常に厳しい現状でありますとか、先生方はそもそも自然体験活動のスペシャリストではない中でそれを求めていくという現状を考えますと、こういう専門家たちがネットワークしているCNACとして、そこにソフトの提供とか、子供たちが使う研修施設で、少年自然の家というのが全国に2,000ぐらいありますけれども、そういう施設の職員たちの研修とか、その辺でかかわっていく余地はまだあるのではないかとということで、その部分を広げようというのがまず一つ。

それから、活動を広げようというのが2つ目で、今まで5年間、まずは安全だろうということで安

全の分野に具体的には特化するような形で、一部人材育成のためのソフトというところもやってまいりましたけれども、きょう登壇していらっしゃる鈴木先生が続けていらっしゃるような草の根的な環境教育活動ですとか、あとは動植物を保護するための活動ですとか、その辺のスポーツや野外活動という切り口よりももっと保護活動みたいなところの分野の方たちとの接点を、メリットをお互いに感じられるような接点を持っていこうということで、活動を広げていこうというのが2つ目です。

それから、感動を広げようということで、まさに堀さんがおっしゃっていたような、親御さんからのお手紙みたいなのが、まさにその部分かと思うんですけども、全国ネットワークの利点を生かして、全国各地でそういう場を持てるような活動を進めていきたいと思いますということで、感動を広げよう。

そういう3本柱で、今後数年間になるかと思うんですが、CNACとしての活動方針を、具体的には事業計画の中に落とししていくというのが、今後の取り組みになってくるかと思っておりますので、その辺で自分もつながれるとか、こういうアイデアがあるんじゃないかというのは、外からのお声をいただいて、できればそこにお仲間になっていただいて、一緒に汗をかいていただける方もどんどんそこに手をつないでいきたいという思いでおります。

というのが現状でございます。

三好 ありがとうございます。

CNACとしてはそういった形でお仲間を広げていきたいと思っておりますので、本日ご参加の中にはCNACの会員さんでない方のほうが多いんでございますが、ぜひ一緒にやってみよう、あるいは会員にならなくてもいろんな情報を共有していこうという形で、これからもネットワーク、つながりを持っていければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、第7回の全国フォーラムでございますが、全体討議は以上をもちまして終了とさせていただきます。5名の皆さんに、どうぞ拍手をお願いいたします。(拍手)

どうもありがとうございました。

それでは、司会にマイクを戻します。

司会 壇上の皆様、会場の皆様、長時間にわたり、ありがとうございます。皆様からいただきましたご意見をこれからの活動にぜひとも生かしていきたいと、CNACとしても今回のフォーラムで得られた貴重な情報を全国の会員に発信していきたいと考えております。皆様、どうもありがとうございました。(拍手)

閉会挨拶

小池 潔 氏 (海に学ぶ体験活動協議会 副代表理事)

司会 これから閉会の挨拶に移りますけれども、閉会の挨拶の後、本日ご来場いただいた皆様全員での記念写真を撮りたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。また、その後、交流会にご参加の方は会場をご案内いたしますので、会場を出たホールにお集まりください。

それでは、閉会の挨拶をCNAC副代表理事の小池潔より賜りますので、よろしく願いいたします。

小池 皆様、1時半から5時30分の時間、お疲れさまでした。ご講演いただきました皆様、どうもありがとうございました。

子供は親の背を見て育つと申しますが、私も昨年、5月ぐらいにようやく次男坊を海に連れていきまして、シュノーケリングの体験をさせたんですけれども、非常に喜びまして、その帰りがけに「僕も大きくなったらお父さんみたいに海の仕事をやるよ」と。これは世代交代の次代につながるということを僕は実践したなと思って大喜びしていたんですけれども、わずか2カ月後の七夕の日に、短冊に書いてきたのはサッカー選手になりたいと書いていました。(笑)

私自身は次代に引き継ぐことは失敗してしまいましたが、先ほど穴原さんのスピーチを聞いていて、穴原さんはCNACができたころに大活躍されていた、つくっていらっしゃった、いわゆる第1世代と言ってもいいんじゃないかと思うんですが、環境学習をやっていたらっしゃった方の薫陶を受けて、モイヤーさんほか、海野さん、三好さんなどの薫陶を受けて、次世代に見事に開花して、これからさらに次の世代につながるキーパーソンになるんじゃないかなと思ひまして、非常に心強く、非常に世代がつながっているなというふうに安心いたしました。

きょうぜひ話を聞きたかったサーファーの堀さん、非常に刺激的な話で、本当に楽しかったです。サーフィンを通してつながっている仲間が、ビーチマナーをやろうと言ったときにすぐつながったという話は、海というキーワードを持っている人ならではのつながり方ということで、これも非常に参考になったと思います。

実際にCNACの会員の皆様で、各それぞれの地域で活躍していらっしゃる3つの事例をきょう伺いできたことも大変参考になりましたし、CNACの次の活動を考えるに当たって、たくさんのお話に富んだお話をいただけましたと思います。

CNACは5年間の期間を迎え、7回目のフォーラムを迎えておりますが、いろいろと代表理事、副代表理事からお話がありましたけれども、これからの3年間でまたさらに新しい活動の展開を考えています。そんな中でキーになるのはやはり人とのつながりだと思います。この後、交流会もありますが、私も最近CNACに加わらせていただきましたが、CNACの主な活動の方針というのは、会議よりもむしろ夜の宴席で決まるというような伝統があるようでございますので(笑)、ぜひ交流会のほうにもたくさんの方に参加していただきまして、コミュニケーションをとっていただいて、いろんな視点を持つ、海を見てきた方のご意見、そこから醸し出される何かがCNACの何かにつながればいいかなと思います。

長くなりました。これから交流会がありますので、そのときにぜひたくさんお話をしたいと思ひます。本日は遠くからお越しいただいた演者の皆様、それから多数お越しいただきました皆様、本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)

司会 小池副代表理事、ありがとうございました。

それでは、最後の写真撮影に移りますので、皆様、前のスペースにご集合ください。